

学位請求論文審査報告要旨

2014年10月8日

申請者 三枝 令子

論文題目 語形から意味へー機能中心主義へのアンティテーゼー

論文審査委員 庵 功雄
石黒 圭
前田直子

1. 本論文の内容と構成

本論文は、三枝令子氏が現代日本語文法に関してこれまで発表してきた論考のうちの代表的なものを「語形」という観点から整理し直したものである。

本書の構成は次の通りである。

第1部 語形の持つ陳述性

第1章 活用形の陳述性

- 1 陳述とモダリティ
- 2 活用形の陳述性
- 3 まとめ

第2部 語形から機能を知る

第2章 「ので」「のに」「だけで」「だけに」の分析

- 1 はじめに
- 2 「ので」「だけで」の語構成
- 3 「で」の意味と機能
- 4 「に」の意味と機能
- 5 「の」「だけ」の意味と機能
- 6 「ので」「だけで」の意味と構文的条件
- 7 「のに」「だけに」の意味と構文的条件
- 8 共起する陳述表現
- 9 まとめ

第3部 語形の体系性 「って」の分析

第3章 「って」の構文的位置づけー「と」による引用と「って」による引用の違い

- 1 「って」の多様な用法
- 2 「と」の用法と意味
- 3 「って」の基本的な性格
- 4 「って」の用法
- 5 まとめ

第4章 「だって」「たって」の本義とその用法の広がり

- 1 従来の扱い
 - 2 「たって」「だって」の起源
 - 3 引用の「だって」「たって」
 - 4 逆接の「だって」「たって」と「でも」「ても」
 - 5 接続詞の「だって」
 - 6 終助詞の「だって」
 - 7 まとめ
- 第5章 提題の「って」「ってば」「ったら」
- 1 「言う」の条件形とその慣用表現
 - 2 提題「って」と「は」「なら」
 - 3 提題助詞の働きをする「って」「ってば」「ったら」
 - 4 終助詞的な働きをする「って」「ってば」「ったら」
 - 5 まとめ
- 第6章 「って」の体系
- 1 「って」の語義
 - 2 森重敏による「って」の分析
 - 3 「って」の範囲
 - 4 引用の「って」「だって」
 - 5 逆接の「って」「だって」
 - 6 「って」の分化と体系
- 第4部 語形の持つ機能の連続性
- 第7章 話し言葉における「が」「けど」類の用法
- 1 はじめに
 - 2 話し言葉におけるデータの分析
 - 3 「が」「けど」類の意味と用法
 - 4 まとめ
- 第8章 「だ」が使われるとき
- 1 はじめに
 - 2 「だ」の活用と働き
 - 3 「だ」のモダリティ性
 - 4 「だ」と「である」の使い分け
 - 5 まとめ
- 第5部 品詞の間の連続性
- 第9章 品詞のさまざまなふるまい
- 1 品詞の転成
 - 2 名詞の形容詞的ふるまい
 - 3 名詞の副詞的ふるまい
 - 4 動詞の名詞的ふるまい
 - 5 形容詞の名詞的ふるまい
 - 6 ふるまいの異なる同義語

2. 本論文の概要

本論文は5部9章からなる。

第1章では、陳述とモダリティという概念について論じられている。まず、「陳述論」が「モダリティ論」へと変わる中で、モダリティ（陳述）という概念が文末に現れる要素（「だろう、かもしれない」などの助動詞、終助詞、命令形などの活用形）全体を表すものになってきたこと、および、それにもなって活用形が担う陳述度の違いということが問題とされなくなってきたことが述べられる。次に、活用形による陳述度の違いということ正面から論じた三上章氏の論考が紹介される。これらの議論を受けて、三枝氏は、言い切り形（終止形と連体形を合わせたものに相当）に「叙述形」と「概念形」という2つの形を認める。叙述形は典型的には文末で使われる場合で、テンスやムードを含む。一方、概念形は典型的には英語の不定形に対応する場合（ex. 「パンを作るのは難しい。」の「作る」）で、テンスやムードを含まない。この両者を区別することで、例えば、「彼が話すことは、まちがいだ。」が持つ二義性とそれに由来する陳述度の違いなどを説明できる。

第2章では、「ので」「のに」「だけで」「だけに」が分析される。三枝氏は、これらの類似点と相違点を「の」「だけ」「で」「に」というそれぞれの構成要素（「語形」）の意味から説明する。例えば、「私が持っているので、間に合わせよう。」と「私が持っているので、心配しなくていい。」の二文の「の」は、通常、前者は準体助詞、後者は「のだ」全体で接続助詞とされることが多いが、三枝氏は、両者の違いは「の」の違いではなく、前件の述部の陳述度の違いによるものだとする。すなわち、前者の解釈の場合は「の」の前に述語の概念形が来るのに対し、後者の解釈の場合は「の」の前に述語の叙述形が来るということである。

第3章から第6章は第3部を構成するが、ここでは「って」という語形の意味・機能の広がりや体系性が捉えられる。

第3章では、「って」の構文論的位置づけという観点から、「と」による引用と「って」による引用の違いが論じられる。まず、「と」という語形は、副詞（ex. 「きっぱりと」）、引用、接続助詞、格助詞という用法の違いを持つものの、これらは連続したものであり、「と」によって陳述性が失われ、「と」が受ける部分は想念を表すという点で共通していると三枝氏は説明する。一方、「って」を考える上で重要なのは、①「って」がテ形を取っていることと、②「て」の前に促音が置かれていることであるとする。①について言えば、「って」は、テ形を取ることで、テ形と同じく、その構文環境によってさまざまな意味を表すことができるようになっている（ex. 「行こうって誘われた。」＜動詞が後接＞、「可愛くて仕方がないって風に」＜名詞が後接＞、「その担当者って、私のこと？」＜主に名詞に接続＞、「そんな刑事はいないって」＜文末＞）。②について言えば、促音が入るとするのはポーズが入るということであり、そのことは「って」の前の述語に陳述性があることを意味する。「と」と「って」は共通する点が多いものの、この点において決定的に異なるとする。

第4章では、「って」を含む要素である「だって」と「たって」が取り上げられる。「だって／たって」は、引用、逆接、接続助詞、終助詞というさまざまな構文的、意味的環境に現れるが、それらは「って」の意味の広がりから説明できる。例えば、「って」の前に「だ」が来る場合の用法は次のように連続していると考えられる。「彼は病気だって聞いて

た。」(引用)→「彼は病気だって。」(終助詞)→「病気だって時には必要だ。」(逆接)「だって/たって」の意味の広がりもこれと平行的に捉えられる。

第5章では、提題を表す「って」「ってば」「ったら」が扱われる(ex.「田中さんって、どんな人。」)。「って/ってば/ったら」は、言語コードそのものについて語る際に使われる点で、言語そのものの外にある事象について語る際に使われる「は」とは異なる。例えば、「A:あの二回生はダブったんだ。/B:でもくダブる>って何?」というやり取りで、Aの発話は「あの二回生」の属性などについて語っているのに対し、Bの発話は「ダブる」という言語コード自体について語っている。後者の用法の場合、「は」単独では使えず、「って」を使うか「というのは」という形で引用を含む表現にする必要がある。

第6章では、①引用、②話題の引き込み、③反復、④伝聞、⑤言いつけ、⑥問い返し、⑦訴えかけに分けられる「って」の様々な用法の体系づけが行われている。まず、引用に関しては、森重敏氏の分析にならって、①「って」で受ける句の発話者が誰であるか、②引用句末に「だ」の付加が義務的であるか否か、③主文の述語の有無と述語が必要な場合のその述語の性質、④「って」の省略の可否、という4つの観点から体系づけている。一方、逆接の「って」(「たって/だって」)は、①逆接、②主題の追加、③反発の3つに分類できるが、類似の意味を表す「ても」が、追加の「も」を構成要素に持ち、並べ立ての意味を基本とするのに対して、「たって」「だって」は、「とする」の条件性と、タ形および「だ」という言い切り形の陳述性から、一方で係り助詞的な働きをし、一方では反語的な逆接の働きをすることになる。全体を通して明らかになったことは、もともとは動詞を内包する「って」が、片や接続詞、片や終助詞へと大きく分化し、それとともに陳述性を帯びていく点である。この変化は、一方で述語により近い助動詞を経て、陳述だけを担う終助詞への分化であり、また一方で、これまた述語性を持った接続助詞から接続詞への分化である。

第7章では、話しことばコーパスを用いて、話しことばにおける「が」と「けど」類(「けど、けれど、けれども」)の機能が考察されている。まず、各形式の分布という点では「けど」が圧倒的に使われていることがわかった。一方、文中の出現位置という点では、「が/けど類」は文中でも文末でもほぼ同じ割合で使われており、いわゆる「言いきし」の用法が特殊なものではないことがわかった。さらに、基調となる文体と異なる文体が用いられるスピーチレベルシフトがかなり頻繁に起きていることも明らかになった。このことは、三尾砂氏による「丁寧化百分率」が実際の話しことばにおいては必ずしも当てはまらないことを示している。最後に、①前置き、②逆接・対比、③言い切りの回避、④注釈に分けられる「が/けど類」の用法は、「異なる側面があることを明示的に示す」ということと、「後続節の焦点化」という2つの要因で説明できることが示されている。

第8章では、これまで基本的な繫辞(コピュラ)と見なされてきた「だ」のモダリティ性について考察がなされている。まず、「だ」の中には、男性も女性も使うものがある一方で、男性しか使わないものもあることが指摘される。前者にあたるのは、①感情の吐露(ex.「もうだめだ」)、②不満・非難(ex.「ざまあみろ、だ」)、③発見(ex.「あった!これだ!」)、④思いあたり(ex.「そうか、『絵』だ」)であり、後者にあたるのは、⑤主張・強調(ex.「うそだ!」尾島がまた怒鳴った。)、⑥宣言(ex.「俺は明日からアメリカだ。」)、⑦命令(ex.「礼だ、礼をしろ」)、⑧疑問(ex.「年はいくつだ」)

⑨問い返し (ex. 「このおもちゃが 3000 円だ?」) である。前者は自分に向けた発話であり、後者は他者目当ての発話である。つまり、自分に向けた発話では男女とも「だ」は必須成分であるが、他者に向けた発話では「だ」は一般に、男性においてのみ顕在化できる成分であり (ただし、顕在化は義務的ではない)、女性はこの用法を表す音形をともなったコピュラを持たない。

第9章では、品詞間の連続性が論じられる。その中でも、「大きい／大きな」と「小さい／小さな」については、コーパスを用いた定量的な分析が行われ、その結果、①「い形 (大きい／小さい)」は終止用法と連体用法がほぼ半々であること (「な形 (大きな／小さな)」には連体用法しかない)、②連体用法の場合、「い形」は形式名詞に連なる場合が多いこと、③ただし形式名詞「もの」には「な形」もよく用いられること、④形式名詞を除くと、「な形」は抽象名詞、「い形」は具象名詞に連なることが多いこと、⑤具象名詞に連なることが多い「い形」は、中でも空間名詞に連なることが多く、客観的・物理的な大小を問題にするとと言えること、⑥抽象名詞に連なることが多い「な形」は心理的な大きさを問題にする場合にふさわしいこと、などが明らかになった。

3. 本論文の成果と問題点

本研究の成果は次の通りである。

第一に、「語形」という観点から一貫した分析を行っているという点である。例えば、「私が持っているので大丈夫だ。」という文は、①私が持っている何かで何とかできる、②私が持っているから何とかできる、という2つの意味を持っている。現行の通常分析では、①の解釈のときは「の + で」、②の解釈のときは「ので」、という形で「同音異義語 (または、同音異形態)」として (すなわち、離散的 (discrete) に) 処理するが、本論文では、この多義性は、「で」自体の意味の違い (「道具」か「理由」) に由来し、連続的な (continuous) ものであると考える。「ので」に関するこうした分析は通時的にも妥当性が高く、本論文の観点が文法化の議論にも影響を与えうる可能性を示唆している。「ので」に見られるようなこうした分析手法は本論文中一貫しているが、三枝氏がこうした分析をとる背景には、「言葉の機能を並べあげて片端から学んでいくだけでは、その語を構成要素とするほかの語との関連性がかみにくく、汎用性に欠ける。日本語を機能的に理解するためにも、語形とその構造の理解は不可欠である。言葉の意味がわからない時、あるいは、言葉の意味を人に説明しようとする時、我々は、自然、それがどういう語から成り立っているのかを考える。また、語源は何かということを考える。語源を調べる時に、語形を無視することはできない。実際の用法の説明も有効であり必要だが、それだけではわかった気がしないことが多い。その語を構成している論理関係がとらえられてはじめて、腑に落ちると言ったらいいだろうか。」 (p. 1) という三枝氏の言語観、および、言語教育観がある。こうした分析手法は、伝統的な国語学にあってはむしろ主流のものであったと考えられる (この意味で、本論文の分析が森重敏氏の分析と親和的であるのは偶然ではないだろう) が、現行の (寺村一) 仁田一益岡モデルによる日本語学的な階層構造的言語観とはかなり異質に見える部分が多い。本論文の副題が「機能中心主義へのアンティテーゼ」となっているのはこのあたりの事情を表しているが、こうしたある意味でオーソドックスな言語観を通底させた分析を示すことで、本論文をきっかけに、本論文の

ような形態中心主義の考え方と、日本語学主流派のような機能中心主義の考え方の間に健全な論争が生まれ、それがともすれば停滞しがちである日本語学の研究にとっての起爆剤となる可能性を秘めている。

成果の第二は、同一の語形に属する諸用法を網羅的に扱い、それらを体系づけている点である。本論文の第3部と第4部で扱われている「って」「と」「が／けど類」「だ」はいずれも、表層的にはかなり異なる多くの用法を持っているが、本論文では、それらの用法を全て丁寧に取り上げ、合理的に配列して、自然な形でその連続性を説明している。本論文は日本語教育を直接目的とした研究ではないが、ここで示されている連続性は、長年日本語教育の現場に身を置いてきた三枝氏ならではの形で、学習者にとっての「腑に落ちる」説明になっている。

第三の成果は、早い時期から「話しことばの文法」を対象とした研究を行い、その成果を確実に発表してきたということである。第7章で三枝氏自身が指摘しているように、話しことばのデータは、ある意味で無秩序と言えるようなところもあり、そのため、「話しことばの文法」ということを論じることは現在でも（あるいは、現在においてより）難しいが、そうした課題に三枝氏は早い時期から取り組んできている。ちなみに、一橋大学の機関リポジトリにおける三枝氏の論文の閲覧数は非常に多いが、それは、こうした分野における三枝氏の研究の目配りが評価されてのものであると考えられる。

第四に、コーパスベースの議論を積極的に行い、明確な結果を導き出している点が挙げられる。このことは具体的には第7章の議論に当てはまるが、それだけではなく、「大きい／小さい」と「大きな／小さな」の違いを比較した第9章の議論においては、1980年代に国立国語研究所が所蔵していた電子計算機のデータが用いられており、それによって、前述したようなイ形容詞（「い形」）とナ形容詞（「な形」）とでの共起する名詞の違いが明らかにされている。さらに、イ形容詞は具象名詞と共起しやすく、ナ形容詞は抽象名詞と共起しやすいということの反映として、イ形容詞の割合が自然科学系では相対的に高く、文芸では低いといった事実を指摘している。これらは、大規模コーパスをパソコンで扱うことが普通になった現在ではともかく、そうしたものが一切なかった当時あつては極めて画期的な成果であつたと言える。

こうした成果を挙げている本論文であるが、問題点も存在する。

第一の問題点は、用語の使い方である。特に軸となるキーワードの使い方がやや大づかみで洗練性に欠く印象を受けた。

一つ目は語である。冒頭の部分で、形態素まで含めて語であるという点を強調しているが、この点を強調しすぎると、これまで形態論・語彙論の研究者が精密に記述し、築きあげてきた成果を否定することにならないか。また、この部分が特に本論文の冒頭にあつて目立つため、この一事をもって、本論文全体が低く評価されることになることを恐れる。

二つ目は陳述性である。陳述性は「文としての述語らしさ」のような意味で用いられているようであるが、そうした観点からの分析は、現代の研究水準にあつては、かえって研究史を後退させるおそれがあるように思われる。述語らしさには、「事態成立に対する話し手の認識や判断」「聞き手に対する配慮や意識」「その発話が果たす機能や意図」「テキスト的なまとめや切れ目」というものが複雑に絡みあつていると思われるが、それらを一括して陳述性と称するのは、大ざっぱな把握で問題が大きいのではなからうか(例えば、

接続詞の「だって」と文末の「だって」の陳述性は同じか)。また、モダリティ性という用語もしばしば用いられているが (p. 79 や第 8 章など)、その異同が不明である点も引っかかった (さらに第 8 章末には「述語性」も出てくる)。

第二の問題点は、第二の成果である同一語形の諸用法の体系化を目指すあまり、無理な一般化を行っているように見えるところがある点である。例えば、引用の「って」と逆接の「って」は、縮約する前の形がそれぞれ「と」と「としても」で異なるので、表層上の同一性に合わせて両者をひとまとめにしてもよいのかという疑問が残る。

こうした問題点は存在するものの、これらは本論文全体が挙げた成果に比べれば大きな瑕疵とは言えない。また、三枝氏自身もこれらの問題点に気づいており、本論文が出版される際には、上記の問題点も確実に改善される見通しである。

4. 結論

以上から、本論文が学位論文に値する優れた研究であることを認め、三枝令子氏に一橋大学博士 (学術) の学位を授与することが適当であると考えます。

最終審査結果の要旨

論文審査委員 庵 功雄
石黒 圭
前田直子

2014年9月17日、学位請求論文提出者、三枝令子氏の論文「語形から意味へー機能中心主義へのアンティテーゼー」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、三枝氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって、三枝令子氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有すると認定し、最終試験において合格と判定した。